The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	≪emotion≫ の在処と行方 : 『情念論』における意志をめぐって
Author(s)	冨岡, 基子
Citation	メタフュシカ. 2007, 38, p. 111-124
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6085
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

« émotion » の在処と行方
── 『情念論』における意志をめぐって ──

冨岡基子

『情念論』[1]においてデカルトは、魂の「受動 passion」である「情念 passions」の本質を「情動 émotion」と規定する（§28）。しかし、魂の能動である意志もまた、« émotion » と呼ぶ（§29）。情念を＜動き＞と捉える根拠は、情念が物質である「動物精気の運動 mouvements des esprits animaux」を原因とする点に求められよう。ならば､物質的基盤を持たない意志は､何をもって「動き émotion/mouvement」と呼べるのか。この問いに答えることが本稿の課題である。意志を或る種の＜動き＞と捉えることは、遥かデカルト以前に遡る[2]。とはいえ、その＜動き＞であることの根拠、すなわち情動性 émotionnalité の実質を問うことは今日まで続く哲学的営み[3]のひとつであり、本稿も僅かであれこの営みに与れるよう、論を進めたい。

以下、まずは『情念論』第 1 部、「情念の定義」へと至る諸項を、「知覚」概念の射程を測りつつ進み、「意志の知覚」の固有性ならびに意志と情念の共通性を引き出す（第 1 節）。次いで、恐れの情念に対する（第 2 節）、ならびに知的喜びにおける（第 3 節）意志のありようについての考察を通して、『情念論』における意志の情動性の実質を浮かび上がらせることを試みる[4]。

---

1 『情念論』のテキストは *Les Passions de l'âme*, éd. par G. Rodis-Lewis, Vrin, 1999 により（項数は「§」を付して略記）、書簡は AT 版による。邦訳は白水社のデカルト全集を参照した。なお、引用中の強調は全て本稿による。参考文献は註においてそれぞれ示す。

2 *Cf. e.g.* E. Gilson, *Introduction à l'étude de Saint Augustin*, 5e éd. Vrin, 1987, pp. 171-172.

3 *Cf. e.g.* M. Henry, *L'essence de la manifestation*, P.U.F., 1963 ; *Généalogie de la psychanalyse*, P.U.F., 1985, chapitre 1 "videre videor".

4 本稿第 1 節と第 2 節は、身体の諸機能（§1-15）、精神の諸機能から情念の定義（§17-29）、心身合一体における情念の生理学的基盤（§30-40）、意志の基本的な働き（§41-50）を論ずる『情念論』第 1 部を中心に、最終節は、6 つの基本的情念（「驚き」、「愛」、「憎しみ」、「欲望」、「喜び」、「悲しみ」）を扱う第 2 部と、意志と情念と知的感情の関係を考察するうえで最も重要なシャニュ宛書簡（1647 年 2 月 1 日付）ならびに意志と悟性の関係に言及するレギウス宛書簡（1641 年 5 月付）を取り扱う。

１．＜知覚／情動＞としての情念と意志

『情念論』第 17 項においてデカルトは、魂の機能が思惟のみに存することを、先立つ諸項から導出したうえで、思惟を魂の能動／受動の二つに区分する。魂の能動とは、「魂に直接に由来」し「魂にのみ依拠する」もの、すなわち「意志の全て toutes nos volontés」を、他方、魂の受動は、「われわれのうちに見出されるあらゆる知覚や認識」を指す。「知覚 perception」とここでデカルトが呼ぶものの射程を測ることから始めよう。知覚の定義を与える第 19 項はまず、知覚の原因を魂と身体の二つに分ける。身体を原因とする知覚はさらに、神経に依拠するものとしないものとに分けられ（§21）、前者は意志に拠らない想像を、後者は、見る･聴くといった外的感覚（§23）、「飢え」「渇き」「痛み」「熱さ」（§24）といった内的感覚、そして「喜び、怒り等」（§25）、これら全てを含む。他方、魂を原因とする知覚は、魂から生ずるもの、すなわち「意志の知覚 les perceptions de nos volontés、および意志に依拠する一切の想像やその他の思惟についての知覚」を指す。ここで注意しておかなければならないことは、意志はまずもって、魂の能動として、魂の受動たる知覚には含まれていなかったこと、にもかかわらず、意志の知覚は、魂を原因とする知覚として、魂の受動たる知覚に数え入れられること、このことである。魂の能動／受動は、魂を原因とするか否かに依って区別される。魂を原因としない夢想、感覚あるいは感情はそれゆえ、魂の受動に含まれる。それでは、魂の能動である意志の知覚は、知覚である限りにおいて、感覚や感情と同じく受動であるということになるのか。あるいは、知覚でありながらも、魂を原因とするという点で他の諸知覚とは異なるのか。第 19 項、魂を原因として持つ知覚の定義に続く箇所が、それに答える。

> 確かに、われわれは意志していると知覚することなしに何ものも意志することができない[5]。ところで、何かを意志することは、魂について言えばひとつの能動であるが、自らが意志していると知覚することは、魂においてはまたひとつの受動であると言える。しかし、この知覚とこの意志とは実際には同じひとつのものにほかならぬから、[...] 受動と呼ばれず単に能動と呼ばれる（§19）。

重要なのは、意志とその知覚がそれぞれ能動と受動に分たれているという点ではなく、「実際には同じひとつのもの」にほかならず、それゆえに意志の知覚は、知覚でありながらも能動と呼ばれる、という意志の知覚に特有の性格である。意志の知覚は、魂それ自体[6]が自らの働きを知覚

---

[5] « Car il est certain que nous ne saurions vouloir aucune chose, que nous n'apercevions par même moyen que nous la voulons » ; *cf.*「我々は知性のうちにあるものについてのみならず、およそ意志のうちにあるものについても観念をもっている。およそ意志していると知らずして何事かを意志することはできないのであるから」（*à Mersenne,* 28/01/1641, AT. III, 295.22-25 ; aussi *à Regius*, ??/05/1641, AT. III, 372.13-14）。

[6] 本稿は＜魂それ自体＞という語を、心身合一体における魂を、身体から区別して論じる際に用いる。デカルト哲学における、「精神 mens/esprit」「魂 âme」「合一体における魂それ自体 âme toute seule」「身体と合一した魂 âme unie au corps」の区別と連関を明らかにするという大きな試みの端緒に位置づけられる本稿において、âme の訳語は常に「魂」である。なお、魂それ自体 âme toute seule」と「身体と合一した魂 âme unie au corps」の相関関係を介して心身合一体の諸問題を検討するという方向性を、本稿はカンブシュネルの仕事から学んだ（D.

することにあるのだから、この知覚においては＜働く＞と＜知る＞と＜知る者＞が「魂それ自体」とぴたりと重なる。しかし、意志を除く全ての諸知覚については、「身体と合一した魂」が、魂が原因ではない変化なり変状を知ることに存するため、この重なりは成立しえない。意志の知覚はそれゆえ、知覚でありながらも、実際には、意志の、ひいては魂そのものの自己覚知であることから能動に転じ、本来の意味での魂の受動である他の諸知覚とは一線を画す。

魂の能動／受動の区分、受動としての諸知覚の分類を経て、『情念論』は第 27 項で、自らの主題であるところの＜狭義の passions= 情念＞の定義に至る――「魂の情念とは、魂の知覚 perceptions、感覚 sentiments、情動 émotions であり、とりわけ魂に関係付けられるところの、かつ［動物］精気のなんらかの運動によって引き起こされ維持され強められるところの、それらである」（§27）。情念は、明証的な認識をもたらす知覚とは対照的に、「混乱し不明瞭な知覚」（§28）でしかないとはいえ、「真に、感じられるがままのものでしかありえない」（§26）という点で過つことがない、そのような「知覚」である。また、魂が情念をもつその仕方が、あらゆる感覚経験の基盤にある＜感じる＞という仕方でしかありえないゆえに、情念を「感覚」と言ってもよい。しかし、情念の性格を最も正確に掴むには、「知覚」でも「感覚」でも不充分だとデカルトは言う。

> しかし、情念は魂の情動 émotion と呼ぶほうがさらにいっそう適切である。なぜなら、この情動という言葉は、魂のうちに生ずる一切の変化、すなわち魂に来たるあらゆる多様な思惟に用いられるのみならず、とりわけ、魂の持ちうるあらゆる種類の思惟のなかで、情念ほど強く魂を刺激し、揺り動かすものはないからである（§28）。

情念の情念たる所以は、この情動性すなわち魂の揺り動かしにある。情念の本質を明らかにするために認められたこの一文はさらに、情動と呼びうるのが情念のみに留まらず、「魂に生ずる一切の変化、すなわち魂に来たる全ての多様な思惟」もまた émotion[7]であることを、情念ばかりでなく魂の全ての思惟が、多かれ少なかれ魂を揺り動かすなにものかであることを、教える。「あらゆる多様な思惟」のうちには勿論意志も含まれること、意志もそれゆえに émotion であることは、第 29 項が明記する。

> ［...］また私が、情念は精気のなんらかの運動によって引き起こされ、維持され、強められる、と付け加えているのは、情念を意志から区別するためである。意志も魂に関係づけられる、魂の情動と呼びうるが、意志は魂自身によって引き起こされるところのものである。［...］（§29）

Kambouchner, *L'homme des passions*, Albin Michel, 1995, vol. II, surtout pp. 81-82）。émotion 概念についての纏まった論考である D. Kambouchner, « Émotion et raison : l'erreur de Damasio » in *Les émotions*, sous la direction de J.-C. Goddard, Vrin-Corpus, 2007 は、émotion 概念が passions よりも広範囲に及び、意志までも含むことを明示しているが、残念ながら意志の情動性の実質は主題として取り上げられていない。

7 本稿の主題が意志の情動性にあるため、「多様な全ての思惟」の情動性について論ずる機会は後の論考に委ねなければならない。現時点では、意志の情動性の実質を明らかにすることが、その他の思惟の情動性についての見通しも開きうると記すに留める。

動物精気ではなく魂自身が引き起こすという点で情念と異なるとはいえ、意志もまた情動である。第 29 項が我々に提示することはしかし、それだけに留まらない。「動物精気の運動によって引き起こされる」という点を情念の定義に付け加える理由が、情念を意志から区別するためであるならば、原因が動物精気にあるという点が、情念を意志から区別する指標たりうることを、すなわち、原因が動物精気か否かということそれだけによって区別できる共通の基盤を、あるいは近しさ[8]を、情念が意志と持っていることを意味する。

かくして、端緒においては魂の能動／受動として分たれていた意志と情念が、共に知覚であり、さらには情動でもあること、ならびに、原因の相違によってのみ区別しうるほどの近しさを持っていること、以上二点により、両者の関係を新たな角度から捉える可能性がここに開かれる。但し、その開示に立ち会うためには、意志の情動性とは何に存するのかを掴まねばならない。意志と情念が、原因の相違を除けば、共に魂の情動であることを考慮に入れるなら、情念との関わりのなかでの意志のありようを考察することが、意志の情動性の実質に近づく鍵を我々に与えてくれる筈である。続く 2 節を導く問いはそれゆえ、次のように立てられよう、すなわち、意志の情動性は、情念を抱く魂におけるどのような＜動き＞を指すのだろうか。

２．＜強いられた同意＞[9]あるいは＜抵抗する意志＞ —— 第 40 項及び第 46 項

意志と情念については、第 39 項に至るまで、両者の区別あるいは対比のみにしか触れられない。知覚・情動を共通軸として持つ意志と情念をその動態において捉えるために、本節は、情念が生起する場において、意志がどのように働くか、情念に対して意志がどのようにあるのかを論ずる第 40 項を導きの糸として、始めたい。

> ［...］人間におけるあらゆる情念の主要な効果は、情念が人間の身体に準備させてやらせようとすることを、魂もそれを意志するように、魂を促し、それに仕向けることである。たとえば、恐れの感覚は逃走を意志するように魂を促し、大胆の感覚は戦いを意志するように魂を促す（§40）[10]。

---

8 情念も意志も共に、魂に内的な経験として感じられるものである；*cf.* « ... elles [passions] sont si proches et *si intérieures à notre âme*, qu'il est impossible qu'elle les sente sans qu'elles soient véritablement telles qu'elle les sent »（§ 26）; « la connaissance de l'existence de Dieu ne nous doit pas empêcher d'être assurés de notre libre arbitre [*sc*. la volonté], parce que nous *l'expérimentons et le sentons en nous-mêmes* »（*à Elisabeth*, 03/11/1645, AT. IV, 332.25-333.01）.

9 「強いられた同意 consentement exigé」という表現を、本稿はドゥラマール論文（A. J.-L. Delamarre, « Du consentement : Remarques sur l'article 40 du *Traité des Passions* » in *La Passion de la raison*, P.U.F., 1983, pp. 131-143）に対してカンブシュネル（« La troisième intériorité : L'institution naturelle des passions et la notion cartésienne du « sens intérieur » », in *Revue Philosophique*, 1988, nº 4, pp. 457-484, p. 473, n. 67）が記した註からお借りした。ドゥラマールは「強いられた同意」が意志の自由を欠いているという点をパラドクスであると考える。しかし本稿は以下、第 40 項の「情念が魂を促す」が意志の自由と矛盾しないということを、意志の知覚の度合いの相違によって示す。

10 « ... le principal effet de toutes les passions dans les hommes, est qu'elles *incitent et disposent leur âme à vouloir* les choses auxquelles elles préparent leur corps：en sorte que le sentiment de la peur l'incite à vouloir fuir, celui de la hardiesse à vouloir combattre ... ».

情念が、逃走あるいは戦いを「意志するように魂を促す」と述べてすぐさま、続く第41項の冒頭でデカルトは、「しかし、意志はその本性上自由であって、決して強制されえない」と続け、情念が「意志を促し」「仕向ける」という事態が、意志が「本性上自由である」ことと、一見すればそうであるようには矛盾しない、そのような意志のありようを浮かび上がらせる。自由であることと情念に促されてあることが同時に成立しうる、このような意志のありようを掴むことが、情念が生起する場における意志を捉えることを可能にする。以下、情念と意志が織りなす多様な関係のなかで特に、＜恐れの情念に対する意志の抵抗＞を取り上げる。

情念と意志は、各々原因を異にする思惟であるがゆえに、互いに一方が他方を生み出す関係にはなく、互いに直接働きかける関係にもない[11]。＜身体と合一した魂＞のうちで思惟として共在する情念と意志はそれゆえ、独自の間接的／並列的関係にある。この関係を意志の側から記述するなら、次のように表現されよう、すなわち、意志が或る情念を鎮めるために、あるいは引き起こすために為しうることは、退けたい情念に対立するもの、あるいは持とうとする情念に結びつくもの、これらの表象あるいは認識をもつこと、それだけである（§45）。例えば、恐れを抱かせる場において勇敢であるためには、勇敢でありたいと意志するだけでは足りず、勇敢であることが安全をもたらし、誇りや喜びを与える、という認識をもって臨まねばならない（*ibid.*）。というのも、情念は「心臓のうちに、ひいてはまた血液全体や精気になんらかの運動・興奮 émotion の生起を伴っている」ため、情念を起こしている動物精気の運動が終息するかあるいは別の運動へと変化しない限り、問題の情念は「我々の思惟に現前し続ける」（§46）[12] からである。同様に、勇敢であることを望み、勇敢であることが安全を保障し誇りと喜びを生むという認識をもって臨んでも、勇敢の情念を引き起こすのに適った運動・興奮が生起しない限り、この情念を抱くことはできない。

意志の側から情念に対して、間接的にしか影響を与えることができないとはいえ、比較的弱い情念に対してならば、情念から注意を逸らせることによって、あるいは情念以外のことに注意を向けることによって、問題の情念の原因である動物精気の流れを変えることができる（§47）。他方、強く激しい情念については、注意を逸らせても、注意を他に振り向けても、情念を引き起こしている精気の流れを変えるには至らず、精気の運動・興奮が鎮まるまで、われわれの魂は問題の情念に対峙し続けなければならない。このとき、「意志の為しうる最大のことは、この運動・興奮が続く間、この運動・興奮の諸結果に同意しないこと、運動・興奮によって促される身体の

[11] 「それら二つ［精神の能動と受動］のうちの第一のものは、絶対的に魂の支配下にあり、身体によっては間接的にしか変えられない」（§41）；「我々の情念も、意志の作用によって同じく直接に引き起こされたり取り除かれたりすることはありえない」（§45）；「意志は情念を直接に引き起こす力を持たない」（§47）。

[12] « [...] elles [les passions de l'âme] sont presque toutes accompagnées de quelque émotion qui se fait dans le cœur, et par conséquent aussi en tout le sang et les esprits, en sorte que jusqu'à ce que cette émotion ait cessé, elles demeurent présentes à notre pensée, en même façon que les objets sensibles y sont présents, pendant qu'ils agissent contre les organes de nos sens » (§46).

運動の幾つかを抑えることである」(§46)[13]。われわれの魂の注意を惹かずにはおかない強く激しい情念に対峙して、意志が為しうるのは、精気の運動の諸結果に「同意しない」こと、精気の興奮が促す運動に抵抗すること、に止まる。「同意しない」という否定を含んでいても、抵抗するという他への関係を含む働きであっても、それが意志の働きであることに変わりはない。強力な情念の生起に伴い、精気の運動・興奮の結果に「同意しない」ことあるいは＜抵抗すること＞が意志の為しうる最大、ということはつまりそれ以上は為しえないからといって、意志の自由が強制ないし制限されているわけでもない。なんとなれば、意志は、恐れのような強く激しい情念の生起においても、精気の運動の結果に＜同意＞して逃げることも、＜抵抗＞して逃げないことも、そのどちらをも為しうるのだから。ただ、精気の運動に同意を与えれば、情念は鎮まるどころかますます勢いを増し、魂が、現前する情念に一層囚われるという事態を招くことは避けられない[14]。精気の運動・興奮の結果に「同意しない」で、情念の支配を免れることが最善であると分かっていても、意志が同意を与えてしまうことはありうる。否、少なからずある。そうでなければ、あるいは、もし強力な情念の生起のなかで意志が精気の運動に抵抗することが常に難なくできるなら、どうして情念の統御など問題となりえよう。かくして、意志が、強力な情念の生起において精気の運動・興奮の結果に同意することもしないこともできるゆえ、常に自由であること、それは変わらない。にもかかわらず、それでもやはり次のように問わざるをえない。すなわち、強烈な情念に対峙して「同意しない」意志、抵抗する意志は、穏やかな情念の生起において行使される意志とは、なんらかの点で異なっているのではないか、と。

「魂の強さあるいは弱さは何に存するか」を論ずる第 48 項は、「魂の強さ」が、「きわめて容易に情念に打ち克ち、情念に伴う身体の運動を抑えうる」ことにあるとする。情念に打ち克つということは、「意志固有の武器」をもって、具体的には、「意志がそれに従って自らの生の活動を導くと決意するところの、善悪の認識に関する堅固できっぱりとした判断」をもって、情念に立ち向かうことを意味する。しかし、続く第 49 項は、この判断が、たとえ「誤っていても」、たとえ「以前に意志を打ち負かしたり惑わしたことのある情念」に基づいていても、「その判断を生んだ情念がなくなってからも依然として意志がその判断に従うのなら」、その判断も「意志固有の武器」と見なしうると述べ、魂の強さが必ずしも善悪の判断に従うことに拠るのではないことを、最も重要なことは、意志が判断に従っているかどうかに拠ることを明らかにする。だからこそ、この、善悪の理性的な認識に基づいてはいない判断に「より従いうるか、そして、その判断に反する現前の情念によりより抵抗しうるか」によっても、「魂の強さ」を言うことができる。とい

[13] « Le plus que la volonté puisse faire, pendant que cette émotion est en sa vigueur, c'est de ne pas consentir à ses effets, et de retenir plusieurs des mouvements auxquels elle dispose le corps » (§46).

[14] 恐れの他、例えば「憎しみ」(§79)、「悲しみ」(§92) については＜囚われる＞と表現されよう。他方、「愛」(§79) や「喜び」(§91) ならば＜充たされる＞に置き換えられよう。あらゆる情念は魂を、云々の興奮の結果へ同意するよう＜促す＞のであり、云々の運動へと＜決定づける＞のではない。だからこそ、悲しみにおいて喜びを見出すという一見すれば矛盾のように想われることが、また「情念に運ばれるがままになっている者でさえ、その内奥においては、この世の生には悪よりも多くの善があると常に判断」(*à Elisabeth*, ??/01/1646, AT. IV, 355.26-30) するということが起こりうる。情念の治癒 (§148, §211) において意志が鍵を握るのもこの点に関わる。

うことはつまり、この判断に従えば従うほど、この判断をもって情念に抵抗すればするほど、魂はより強くなる、と言える。以上のことを、意志の特性 ――「意志していると知覚することなしに何ものも意志することができない」（*cf.* 註 4）―― に即して考えるなら、善悪の理性的な認識に拠るのであれそうでないのであれ「堅固できっぱりとした判断」をもって情念に抵抗するということは、情念の生起のなかで、魂が「堅固できっぱりとした判断」に従っているという知覚を持つ、ということに等しい。そうであるならば、この「堅固な判断」によりより一層従うということは、この判断に従っているという知覚がそれだけより強くなるということを意味する。それゆえ、魂の強さは、知覚の観点から捉えるなら、意志の知覚をどれだけ強く持てるかに拠っていると、さらには、意志の知覚の程度は、どれだけ「堅固な判断」に従っているかに依って異なると言うことができる。この知覚の度合いの相違を、以下、恐れの情念に対峙する意志のありように照らして見てみよう。

恐れの情念に対峙して、勇敢であろうとする魂の思惟には＜恐れの情念＞と＜精気が促す運動・興奮に抵抗する意志＞の知覚が、共に「現前」している。精気が起こす運動・興奮に抗って恐れが鎮まるのを俟つ間もだから、我々は恐れを感じ続ける。他方、恐れが鎮まるのを俟つとは、意志が抵抗し続けることを意味するゆえ、その間も意志は常に働いており、このとき魂は必ず自らの働きである意志を知覚している。しかし、恐れのような強い情念の生起において、魂は、抵抗する意志の知覚をもちながらも、自らの注意を当の情念に奪われざるを得ない[15]。どうしてこのようなことが起こるのか。本節の初めで確認したように、情念と意志の知覚は、共に魂の思惟であり知覚であることにおいて、並列的な関係にある。この並列性は、両者がいずれも、魂にとっては知覚として生きられる限り、共在するときには、魂に同時に感じられていることを、それゆえ、どちらか一方が魂に非常に強く知覚されれば、他方は必然的に弱く知覚されることを、意味する。前段落において見たように、正しかろうが誤っていようが「堅固な判断」に従えば従うだけ、この判断に従う意志の知覚は強まり、この意志の知覚の強さをもってすれば、情念に打ち克つことさえできる。ということはすなわち、意志の知覚の強まりと情念の鎮まりが同時に起こっていることを、また、情念の鎮まりを引き起こすものは意志そのものではなく、意志の知覚の強まりに応じて情念が相対的に弱く感じられることを、意味する。他方、情念が強くなれば、魂は情念の促しに絶えず晒されながら「堅固な判断」に従うことを余儀なくされ、それだけ判断に従う意志の知覚は弱まる。恐れに対峙して勇敢であろうとする魂が直面するのも、情念の促しに晒されながら判断に従うことを余儀なくされる、そのような事態である。このとき、もしそれでも魂が、＜鎮まるのを俟つ＞という判断にさらに従い続けるならば、つまり、意志の知覚が強まるならば、それに伴って情念の現前／知覚は弱まるであろう。しかし、もし強い情念が現前し続けるなかで、＜鎮まるのを俟つ＞という判断に従うことを止めてしまうならば、つまり、意志の知覚が弱まる

[15] 「魂は何かほかの事に注意を集中することによって、小さな音を聞かず、小さな痛みを感じないようにはできるが、しかし同じやり方で雷の音を聞かず、手を焼く火を感じないようにするわけにはいかないのと同様に、些細な情念には打ち克つことができるが、きわめて強く激しい情念には、血液や精気の興奮が鎮まるまでは、打ち克てない」（§46）。

ならば、鎮まるのを俟っている間は、つまり抵抗し続けている間は抑えられていた、恐れの情念を引き起こす運動はさらに勢いをつけて、魂は情念に流されるままになるであろう。

以上を踏まえて、先の問い、すなわち、強烈な情念の生起のなかで「同意しない」意志と、穏やかな情念において行使される意志の相違についての問いに、答えよう。恐れのような強烈な情念の生起のなかでも、もし堅固な判断をもってそれに従い続けることができるなら、「堅固な判断」に従うという意志の知覚の強まりによって、情念に打ち克つことができ、このときの意志の知覚の強さは、善の認識に基づく判断や行為を為す意志のそれと同じくらい強いとさえ言えよう。但し、激しい情念の生起においては、魂は絶えず情念の促しに晒されており、この促しを振り切って堅固な判断を持ち続けることは、比較的穏やかな情念の生起において堅固な判断を持ち続けることに比べるまでもなく、やはり容易なことではない。堅固な判断に従っているという知覚を持つこともそれゆえ、激しい情念の生起においては容易ではない。強烈な情念と穏やかな情念の生起において行使される意志の相違はだから、意志の知覚の度合いの相違に存する。

本節冒頭で提起した第 40 項の問題に戻ろう。これまで見てきたことを踏まえるならば、情念による意志の促しとは、情念によって意志の働きが、逃走することあるいは闘うことへと、あらかじめ決められていることを意味しない。情念の促しとは、情念によって、意志が精気の運動・興奮に抵抗するか否か、同意を与えるか否かを決する、そのような自由を遂行する場が開かれることにほかならない。換言すれば、精気による運動・興奮が魂をどれほど逃走へと促そうとも、同意を与えて情念に委ねるか、情念の鎮まりを俟ってその次に備えるか、これを決めるのは意志であって、情念ではない。どれほど強い情念に対峙し、当の情念に押し流されるがままであるかのように想われるときにも、だから意志の自由は失われない。強力な情念の生起において、意志があたかも無力であるかのように感じられたとて、意志は、精気の運動・興奮に抵抗する／同意を与えないという仕方で、あるいは抵抗しない／同意を与えるという仕方で、意志固有の仕事を遂行している。あたかも無力であるかのように感じられるのは、意志が無力だからなのではなく、遂行する意志の働きが、情念の生起を受けて、堅固な判断に従い難いこと、それゆえに意志の強い知覚がもてないことに拠る。

３．喜びとしての＜意志の動き＞ —— *à Chanut*, le 1 février 1647

強く激しい情念が魂を完全に支配しているかのように想われるときにも、意志は自らの働きを遂行している。そのことを充分には知覚できないことがあるとしても、意志の自由は損なわれない。大切なことは、意志の知覚の度合いの相違をそのものとして認め、情念の生起する場における意志の実質を見誤らないことにある。以上を確認したうえで、本節は、知的感情における意志のありようを捉えることによって、意志の情動性が何に存するのか、という最も重要な問いへと向かう。

デカルトは、愛・憎しみ（§79）、喜び（§91）、悲しみ（§92）について論ずる際に、情念とは異なる＜知的感情＞の存在に言及する。この言及はまず、情念を知的感情と混同するのを避ける

ために為される。愛を論じる第 79 項は、愛とは「魂が自らに適していると想われる対象に意志によって結びつくように魂を促す」情動であると定義した後で、次のように続ける。

> ［…］私がこれらの情動［愛と憎しみ］が精気によって引き起こされると言うのは、情念であり身体に依拠するところの愛や憎しみを、次の二つのものから区別するためである。すなわち、そのひとつは、魂が自ら善と見るものと意志によって結合し、悪と見るものからは離れるようにするところの判断であり、もうひとつは、この判断のみによって魂のうちに引き起こされる情動である（§79）。

「精気によって引き起こされる」という点で情念が知的感情から区別される、ということはつまり、＜精気によって引き起こされるか否か＞ということが区別の指標として有効であるような共通の基盤を、両者が持っていることを意味する。この点は、第 1 節の情念と意志の区別においても見られたことを想い起しておきたい。情念と意志の近しさは、情念と知的感情のそれに等しいのだろうか、という問いはひとまず脇に措いて、喜びについてのデカルトの論述も愛のそれと同じ手順をとることを確認しておこう。第 91 項は、情念としての喜びを、「魂による善の享受」によって生ずる「魂の快い情動」と定義したうえで、このとき享受される善は、「脳の印象」が魂に魂のものとして表すところの善であると付け加える。「脳の印象」と付け加えるのは、情念としての喜びを「魂の作用それだけによって魂に生ずる」「純粋に知的な喜びと混同しないためである」。知的な喜びはそれゆえ、「脳の印象」ではなく「悟性が魂に魂のものとして表す善」の享受によって引き起こされる。愛についても喜びについてもデカルトは、まずは情念を知的感情と混同しないことに注意を促し、知的感情の原因が、動物精気ではなく、魂の作用それだけにあることをもって両者の区別を浮かび上がらせたすぐ後で、次のように続ける ――「確かに、魂が身体に結合されている限りは、この知的な喜びも、情念である喜びに伴われざるを得ない」（§91）、あるいは「我々の魂が身体と結合している限り、通常、理性的な愛は常に官能的 sensuelle ないし感覚的 sensitive と呼ばれる愛に伴われている」（*à Chanut*, 01/02/1647, AT. IV, 602）。知的感情は、原因において情念と異なるが、しかし＜身体と合一した魂＞においては情念に「伴われ」あるいは情念と「混同」されている。そうであっても、＜魂の働きそれだけによってのみ引き起こされる情動＞すなわち意志の情動が、知的感情においてはそのものとして生きられている筈である。この見通しをもって、シャニュ宛書簡（1647 年 2 月 1 日付）に認められた「意志の動きは魂の喜びである」というテーズの検討へと進もう。

愛について立てられた三つの問いに答えるシャニュ宛書簡においてデカルトは、第 79 項が論ずる知的な愛の定義に触れた後、次のように続ける。

> その善［= 魂が自らにとって適切であると判断する善］が現前している場合、すなわち、あるいは魂がその善を所有しているか、あるいはその善によって所有されている場合、あるいは魂がその善に、単に意志によって結びつくばかりでなく、実際に、魂にとって適切な仕方で結びつく場合、魂の、その善が魂にとって善であるという認識を伴う意志の動きは、魂の喜びと申せます[16]。

ここでおさえておかねばならないことは、「意志の動きが喜びである」と言われるときの「意志」のありようである。「意志をもって対象と結びつく」というときの「意志」は、デカルトがそのために一項を割いて注意を促しているように、＜結びつこう＞という「欲望」ではなく、「それによって、自らが自らの愛するものと既に今から結びついていると見なすところの、同意 consentement」（§80）である。「意志の動きが喜びである」ときの「意志」もそれゆえ、魂が善と判断するものを前にして、そのものと既に今から結びついていると見なすことに「同意」する、ということにほかならない。この点を確認して書簡を先へ読み進めよう。

知的感情としての「愛、喜び、悲しみそして欲望が存するところの意志の動きは、たとえ魂が身体を持たなくても、魂のうちに見出されうる」としたうえで、デカルトは自然のうちにある美の存在に気づいた魂の意志のありようを次のように描き出す。

> 例えば、魂が、自然のなかに、知るに値する多くの美の存在を知覚するなら、魂の意志は過つことなくそれらの認識を愛することへ、すなわちそれらの認識が自らに属すると見なすことへと向かうこと se porter になるのです。そのうえ、自らにそのような認識があると気づけば、魂は喜びを感じるでありましょうし、逆にそれを持たないと考えれば、悲しみを抱くでありましょう[17]。

「意志の動き」とは何に存するかを明らかにするうえで看過できないことは、1 /「過つことなく」が意味する、意志の働きと美の認識との結びつき、2 /「認識があると気づけば、魂は喜びを感じる」が意味する、知覚と喜びの関係、この二点である。まずは、ひとたび美の存在を認めれば、魂は必ずやその認識が自らに属すと見なすことに同意する、という、この意志と認識の必然的とも呼べる結びつきについて考察してゆこう。

＜身体と合一した魂＞においても、意志を云々の運動／判断／行為へと促すものは、情念だけに限らない。そこでも悟性は働いており、＜身体と合一した魂＞もそれゆえ、悟性が与える云々の認識を持つことができる。例えば、恐れの情念に対峙して、悟性の与える＜逃げないことが正

---

[16] « [...] s'il est présent, c'est-à-dire, si elle le possède, ou qu'elle en soit possédée, ou enfin qu'elle soit jointe à lui non seulement par sa volonté, mais aussi réellement et de fait, en la façon qu'il lui convient d'être jointe, *le mouvement de sa volonté*, qui accompagne la connaissance qu'elle a que ce lui est un bien, *est sa joie* » (AT. III, 601.19-27).

[17] « [...] par exemple, si elle s'apercevait qu'il y a beaucoup de choses à connaître en la nature, qui sont fort belles, sa volonté *se porterait infailliblement à* aimer la connaissance de ces choses, c'est-à-dire, *à la considérer comme lui appartenant*. Et si elle remarquait, avec cela, qu'elle eût cette connaissance, elle en aurait de la joie » (AT. III, 602.8-13).

しい＞という認識に従うと決めるなら、魂は、現前する情念に抵抗し続ける。しかし、＜身体と合一した魂＞においては、それが身体と合一している限り、必ずなんらかの情念が生起しているゆえ、悟性がもたらす認識が特権的に、意志を云々の運動、判断へと促すというわけにはゆかない、つまり、認識の正しさが必ずしもそれに対応する意志の働きと連動するとは限らない。例えば、恐れの情念の生起のなかで、逃げないことが正しいと分かっていても逃げてしまうことは大いにありうる。この、悟性が与える認識によって＜正しいと分って＞いながらも＜逃げてしまう＞という事態を引き起こすのは、意志が悟性の認識に対してではなく情念の促しに同意を与えてしまうからである。第 47 項が記すように、「我々のうちにはただひとつの魂しかなく、この魂にはいかなる部分の相違もない」ゆえ、「理性的」であるところの魂が内的／外的感覚も受け取り、情念も感じる。魂はだから、いかなるときにも「理性的」であり、それゆえにこそ「魂のあらゆる欲求 appétits は意志」である。にもかかわらず、この魂の欲求であるところの意志が理性に反する判断あるいは行為を遂行しうるのは、「我々のうちに認められても理性と対立するもの」が帰せられるべき「身体」との関係において、より正確には、身体によって引き起こされる情念との関係においてである。それゆえ、＜身体と合一した魂＞は、情念の生起のなかで、悟性がもたらす認識に従うこともあれば、従えないこともある。

他方、＜魂それ自体＞においては、すなわち、情念の生起を考慮に入れなければ、「意志」が「魂の能動」であり、そして情念ではなく「知解作用 intellection」だけがその「受動」（*à Régius*, ??/05/1641, AT. III, 372）となるため、悟性の与える正しい認識に意志が同意することを妨げるものは何もない。だからこそ、先に引用したシャニュ宛書簡に戻るなら、正しい認識を前にして意志は「過つことなく」同意を与えることができるのである。「過つことがない」のは、意志が、認識によって同意を与えるように強制されているからではなく、情念によって妨げられることがない＜魂それ自体＞は、悟性が示す善に向かうことこそを、自らの自由な働きすなわち意志をもって遂行できるからである。『情念論』の定義に照らすなら、「知的喜び」は「悟性が魂に魂のものとして表す」善の享受にある。善を＜魂に表すこと＞、すなわち云々が善であるという認識を魂に表すことは、悟性の働きが担い、その善を＜魂のものとすること＞、すなわちその認識に意志をもって結びつくことは、意志の「同意」が担う。知的喜びが生ずるためには、悟性が与える善の認識が不可欠であるが、それだけでは喜びは生まれない。悟性が認めるその善を魂のものとすることに同意するという意志の働きがあってはじめて喜びが生ずる。

確かに、「或る事物を、同時に知解することなくして意志することはできず、或る事物を、同時に意志することなくしては殆ど何も知解することができない」（*à Régius, ibid.*）ため、意志と悟性の関係は、実はどちらが能動でどちらが受動かを区別し難くするほどまでに緊密である。先の書簡に即して述べるなら、悟性の認識が与えられたからこそ意志は同意を与えるのか、意志をもって臨んだからこそ悟性の認識が与えられたのか、そのことは区別し難い。しかし、そうであっても、悟性に対する意志の能動は揺るがない。意志の＜同意する＞あるいは＜愛する＞を決めるのは、悟性の認識ではなく意志である。意志によって求められるか、意志によって同意を与えられるかしない限り、悟性の認識それだけでは、魂は＜愛する＞に、ひいては喜びに至ることが

できない。悟性の認識が意志に与えられるのはただ、促しだけである。このことは、＜身体と合一した魂＞における情念の意志に対する関係に等しい。情念に対しても、悟性の認識に対しても、それに同意するか否かを決するのは意志である。

先に引用したシャニュ宛書簡のもうひとつの重要な点、すなわち「認識があると気づけば、魂は喜びを感じる」が示す知覚と喜びとの関係について最後に見ておこう。魂が、美の存在の認識が自らに属していると知ることは、そのように見なすことに自ら同意したことを知ることに等しい。そうであるならば、魂が喜びを感じるのは、魂が自ら同意したことを知る、すなわち、魂が自らの同意するという意志の働きを――情念の妨げなく――はっきりと知覚することに拠る。かくして、認識の正しさあるいは確かさへと意志が向かうことと、その意志の働きをはっきり知覚することが喜びを生む、という、意志の知覚が繋ぐ二重構造が、知的感情において浮かび上がる。

美であれ善であれ、その存在に邂逅する・その存在を初めて認識するとき、これらは魂にとって他なるものである。悟性の認識の促しによって、意志が、善あるいは美の認識を自らのものとするために、その認識に結びつく、すなわち、意志が、悟性の働きから生ずる善の認識に向かって[18]、自らの同意とその知覚を以ってこれと一致する、これが意志の動きである。この意志の動きが喜びであると言えるのは、悟性の働きに意志が一致するという魂自らの動きを、魂がはっきりと知覚するからである。情念とは、魂が、精気の動きを感じていることを知覚することにあり、知的感情とは、魂の動きを感じることを知覚することにある。知的感情とはだから、魂の＜動く＞と＜感じる＞と＜知る＞の一致としての喜びにほかならない。

結びにかえて

それでは、＜喜びとしての意志の動き＞は、＜魂それ自体＞においてのみ起こることであり、＜身体と合一した魂＞は、実際には情念しか経験していないのだろうか。力強い情念に対峙して意志は、精気の運動・興奮に抵抗し情念が鎮まるのを俟つという仕方で、自らの働きを行使するが、その知覚は、情念が感じられるほどには強く知覚されないことを、第２節において見た。恐れの情念の生起の只中にあっても、防御することが安全をもたらすという悟性による認識を以って、意志は善へと向かいうる（勿論、この善は＜魂それ自体＞において問題となる善とは本質的に同じものであっても、状況次第で多様に解釈されるという点で異なる）。但し、このとき、その善へと向かう意志の動きは、情念として感じられる動きに比すれば、きわめて弱くしか感じ

[18] 意志が善の認識へと向かうという点については、前註で引用した シャニュ宛書簡のなかの « *sa volonté se porterait infailliblement à aimer* la connaissance de ces choses » と共に、＜身体と合一した魂＞を問題にする『情念論』と＜魂それ自体＞を問題にする『省察』とを繋ぐ、ひとつの導きの糸として『省察』の次の一節を挙げておきたい：« elle [la volonté ou liberté de décision] consiste [...] en cela seulement que *nous nous portons à* affirmer ou à nier, à rechercher ou à fuir ce qui nous est proposé par l'entendement de telle manière que nous ne nous sentons déterminés par aucune force extérieure » (*Méditations de philosophie première*, trad. par Michelle Beyssade, Librairie Générale Française, 1990, pp. 157-159). ＜意志が善へと向かう＞ことについてはデカルトも、アウグスティヌス - トマス・アクィナスの伝統のなかにあると言えるが、デカルトが中世哲学の何を引き継ぎ、何を刷新したのかについては、厳密に考察すべき点が未だ多く残っている。

られない、否、情念の émotion も意志のそれも、その原因は異なれ、同じひとつの魂に感じられる émotions であるため、意志の émotion は情念の強い émotion と混同されて知覚される。しかし、意志の émotion と情念のそれが＜混同されていること＞は、意志の émotion が消えてなくなることを意味するのではなく、魂に生起する émotions を同時に知覚している魂には、あたかも情念の強い émotion だけが魂を支配するかのように感じられることを意味する。他方、第 3 節において見たように、情念の生起がなく、意志の動きをはっきりと知覚するならば、意志の動きは喜びとなる。この意志の動きの知覚としての喜びを、情念の生起の場に即して考えるなら、恐れの情念が鎮まるのを俟ち続けた魂は、恐れの情念が去った後、自らの意志がつねに善へと向かっていたことに気づいて、喜びを抱くであろう。但し、同時に、安堵や安心も感じる筈であり、そこに喜びだけを見出すことはできない。しかしこのことは、魂がこの喜びを生きていることを否定するものではない。かくして、知的感情における＜意志の動きとしての喜び＞が情念と混同されるというのは、意志の émotion と情念のそれが混同されるということと同じ構造に拠る。

情念にのみ従って生きることが、情念の促しに同意を与え続けることである以上、＜身体と合一した魂＞は、意志をもたず情念それだけで生きることができないのと同様に、意志の動きのどれほどはっきりとした知覚も、身体と合一している限りは、情念と混ざり合うゆえ、知的喜びだけで生きることもできない。＜魂それ自体＞における＜喜びとしての意志の動き＞はそれゆえ、＜身体と合一した魂＞において、起こりえないのではなく、ただ、情念の émotion と混ざり合ってしか知覚されない。しかし、＜情念と混ざり合ってしか知覚されない＞ということは、＜身体と合一した魂＞が知的感情を生きることを妨げるどころか、それを実際に生きうることを意味する。＜身体と合一した魂＞においては、つねに情念が生起しているということは、情念がつねに魂に、その意志の自由を遂行する場を開いているということに等しい。すなわち、＜身体と合一した魂＞は、情念の生起のなかで、意志の堅固な判断に従って生きること――知的感情であるところの意志の強い知覚をもつこと――に常に促されている。その限りにおいて、＜身体と合一した魂＞は、いかなる情念からも[19] この喜びを抱くことができる。だからこそ、「情念に最もよく動かされる人間が、人生における甘美を最も味わうことができるのである」（§212）。

（とみおかもとこ　哲学哲学史・博士後期課程）

[19] 「いかなる情念からも喜びを抱くことができる」ことは、『情念論』最終項が我々に教える ――「知恵の主要な有用性とは […] 自ら情念の主人となって、情念を巧みに処することを教え、かくして情念の引き起こす悪を十分耐え易いものにし、さらにはそれらすべての悪からかえって喜びを引き出すようにさせることである」（§212）。

De l' « émotion » de la volonté dans *les Passions de l'âme* — d'où s'ébauche-t-elle ? pourquoi semble-t-elle disparaître ? —

Motoko TOMIOKA

L'émotion de l'âme telle qu'elle est identifiée à la volonté dans l'article 29 des *Passions de l'âme* de Descartes est au cœur de notre étude, dont le but est d'élucider ce sur quoi repose l'émotionnalité de la volonté en dehors de tout mouvement matériel comme des esprits animaux qui causent les passions.

Pour saisir ce qui fait le propre de l'émotionnalité de la volonté, la première section commence par examiner le concept très large de la « perception » cartésienne, qui va des sensations tant internes qu'externes, en passant par les passions, jusqu'à la volonté. Cet examen nous amène à trouver le statut singulier de la perception de la volonté.

En faisant état du cas où la volonté résiste contre la passion de peur, la deuxième section s'attache ensuite à faire ressortir, d'une part, la réalité de la volonté qui s'exerce toujours comme telle libre, au moment même où la passion est tellement forte que la volonté, quant à elle, semble comme si impuissante, et d'autre part, la différence de degré de la perception que l'on a de la volonté par rapport aux diverses passions.

La troisième section se consacre finalement à l'analyse du « mouvement de la volonté » en tant que joie, dont la nature exacte s'explicite dans une lettre à Chanut ; lorsque l'âme rencontre des choses belles ou bonnes, la volonté se porte infailliblement à aimer la connaissance de ces choses, à savoir, à la considérer comme ce qui appartient à l'âme. À ce moment-là, l'âme perçoit, en se réjouissant, son propre action qu'exerce cette volonté. C'est ainsi à la joie intellectuelle ici éprouvée que s'identifie la perception de degré élevé de la volonté.

「キーワード」
情念、意志、知覚、意志の知覚の度合いの相違